上野院ゼミ 2001 年 7 月 3 日

複雑理工学 M1 宮本拓人 (takt@crux.t.u-tokyo.ac.jp)

三浦雅士「近代的自我の神話」[3]

1　インカ帝国の征服とアステカ帝国の征服

本論文で三浦はインカ帝国とアステカ帝国の征服を例に挙げ、ある文化圏において共有されている時代的雰囲気を、アナール派歴史学のことばから「集合心性」と表現している。心性 (mentalité) とは、ある時代、社会、集団において共有される思考パタンや感受の傾向、世界観等を包摂する概念である。これは言語の隠喩にほかならない。「トドロフは、ナワトル語のテクストからスペイン語のテクストへと移行してゆく過程で、インディオの心性に根本的な変化が起こったことを明らかにしている。」[2, p.164]　言語規定的であるような我々は、その言語の変容に伴って心性をも変容させる。

本論文の題目にある近代的自我とは近代的個人の謂いであるが、近代的個人という観念をもつことはすなわち、言説の向こうに自我をもった他者を想定できること、高度な対人間のコミュニケーションを実現する能力である。トドロフは、ルネサンスを経てそのような個人主義を踏まえたとき、「各個人が一般法則では予知できない行動の起点となることができる以上、私たちは必然性の世界から恣意性の世界に移行したのである。」[3, p.165] と述べる。宿命にしたがわず恣意的に行動する他者を理解するには、他者の文脈とでもいうべき、他者の心理を推測するよりほかはない。そこにおいて獲得されるのが、「他者を理解する能力、すなわち他者の身になる能力、「他者の皮膚のなかにすべりこむ」能力」[3, p.172] であり、自身のなかに他者を孕ませる能力である[1]。

そしてトドロフは、「当時のヨーロッパ文明は、自己中心的というより〈他者中心的(アロセントリック)〉である。（中略）中心はよそにある。このことが、いつの日か他者が中心となる可能性を開くのである。」[2][2, p.152] とまでいう。

社会的心理的な面のみからではなく、経済的な面からの説明として、三浦はウォーラーステインの『近代世界システム』を挙げる。しかし必ずしもウォーラーステインを引かずとも、たとえばマルクスの価値形態論にもこのような近代ヨーロッパにおける他者性をみることができるだろう[3]。二つの異なる価値体系をもった社会のあいだで成立する不等価交換が、商人資本における剰余価値（貿易差額）を生み出すことが価値形態論において指摘されている。[5, p.78–80][1, 1.3.3.c(pp.248–254) 世界貨幣, 2.4.2(pp.271–290) 一般定式の矛盾]　つまり他者（外部システム）とのコミュニケーションこそが、社会の駆動力である。さらにこの剰余価値はシステムの同化によって不断に解消されてゆくのであり、そこには新たな剰余価値、すなわち新たなる他者が不断に必要とされる。しかるに近代社会は不断に他者を要求するのであり、他者の存在こそがその成立の要件である。

また他者は、共同体の外部にある他者のみではない。（同じく価値形態論から貨幣の例をひいて

[1] これは廣松渉の四肢構造論における能識を実現する役割扮技にほかならない。対人的コミュニケーションを通じてこのプロセスは “不定人称化” “脱肉化(デカルナチオ)” され、終にはその言語圏、文化圏における言語主体一般 (ideal-speaker-listener) なる「ヒト」（能識的或者）に到達する。しかしインカ人やアステカ人において、そのような能力が欠けているといえるだろうか。

[2]（中略部）ヨーロッパ文明の最大の聖地であり、その象徴的中心であるイェルサレムは、たんにヨーロッパの地域外に存在するだけでなく、対抗する文明（イスラム教徒）の支配下に置かれているのである。ルネッサンスになって、この空間的なズレに別の、時間的なズレが加わる。理想とする時代とは現代でもなく未来でもなく過去であり、しかもその過去はキリスト教徒の過去ではなく、ギリシア人、ローマ人の過去なのである。

[3] あるいはウェーバーの、内部経済 (Binnenwirtschaft) と外部経済 (Außenwirtschaft) も似たようなものか。

もいいが）たとえば大塚久雄は、共同体が「アジア的形態」から「古典古代的形態」を経て「ゲルマン的形態」へと、土地の私的所有の度合いに伴って変遷してゆく過程を説明しているが [4]、これは個々の家父長制家族の成長とともに共同体がその内部において分裂してゆき、多数の隣人＝他者を抱えてゆく過程と理解することができる。

> 「アジア的形態」のばあいには、私的個人はきわめて幼弱で、まだ「部族」的な血縁制的関係のなかにいわば埋没しており、したがって、血縁制的「共同組織が実体 (Substanz) であって、個々人はそれからの偶発的現象 (Akzidenzen) であるか、あるいはそれの純粋に原生的な構成部分に過ぎない[4]」ものとして現れるのに対して「古典古代的形態」では、私的諸個人がすでに共同態に対立していちおう確立されており、したがって「共同体は、一面において自由かつ平等な私的〔土地〕所有者たちのあいだの相互関係[5]」として現れるようになっている。[4, p.111]

2　線状的な発達の観念

三浦は本論文の後半でナチズムや安保闘争を例に挙げ、集団に対する個人の優位は決定的なものではないと主張する。しかし、「リョサやトドロフがいうように、インカやアステカは、個人という考え方が発生しないほど未開な社会だったわけではない。個人である以上に集団であるような存在の仕方を意志的に選んだ人々がそこにはいたのである。」[3, p.196] とは、言いすぎであろう。集団の論理の前にあって個人はもはや自由な主体的個人ではなく、それは意志的に選ぶような在り方ではないはずである。その社会は、個々人の自由意志を表向き肯定しつつも抑圧している病的な全体主義社会である。

全体主義に対して個人主義が倫理的優位に立つものであるとすれば、ルネサンスに開花した個人主義、スペイン人が（ローマ字やスペイン語によって）新大陸にもたらした個人主義が進歩であると言うことも可能であろう。トドロフはナワトル語とスペイン語のあいだに見られる差異を、慎重を期して検討しつつ終いには（技術上の）進化によるものと結論する。しかしそもそも、ここにおいてもはや進化の観念は不必要なのではないか。文化はつねに、無数の摂動に晒されている。しかし文化（もしくは集合心性）の移行してゆく状態が、もとよりも（倫理的に）優れた状態であるという保証はどこにもないし、そもそもそれを計る客観的な倫理的基準を立てるのは困難である。

トドロフは『他者の記号学』[2] 第 II 章第 3 節の最後において、「スペイン人は戦争に勝つ。彼らが対人間のコミュニケーションではインディオよりすぐれていることに異論の余地はない。だが彼らは本当に勝ったのであろうか。」[2, p.135] と問い掛ける。「この勝利は、（中略）世界と一体化する自らの能力を心のうちで踏みつぶしてしまった。その後何世紀もの間、ヨーロッパ人は善良な未開人の夢を追いつづけるであろう。だが未開人は死ぬか、同化されてしまっていた。だからこの夢は不毛のままである他なかったのである。勝利はすでに敗北に満ちていたのだ。」[2, p.135] と、逆説的に締め括る。ここにおいてもはや、文化の移行を「進化」の語で表現する必要はないだろう。

トドロフはこのような文化の進化の観念こそが、ヨーロッパ的、キリスト教的な心性によるものであることを指摘している[6]。

> 順序の変えられない連続として固定され、反復する周期的時間のなかでは、一切はつねに前もって予告され、個別的な出来事はつねにすでに現前している前兆が具体化したものにほかならないが、こうした体系によって支配された時間にかわって、一つの方向性しかもたない時間が支配しはじめる。当時のキリスト教徒が生きていたような、最高潮と預言の実現へと向かう時間である。しかも、イデオロギーとそのイデオロギーに着想をえた活動がこのときに当たって手を組もうとする。すなわち、スペイン人は容易に征服できたという事実のなかに、キリスト教の卓越性を見る（これは神学論争で使用された決定的

[4] マルクス『資本制生産に先行する諸形態』からの引用。
[5] マルクス『資本制生産に先行する諸形態』からの引用。傍点大塚。
[6] 心性という語は用いていない。

な論法である。キリスト教の神の優越性はアステカ族にたいするスペイン人の勝利によって証明されるのである)。しかも彼らが征服を企てたのは、この卓越性の名においてなのだ。一方が他方を正当化し、逆もまた真なりである。そして、たえざる回帰ではなく、キリスト教精神の最終的勝利に向かう無限の進行というキリスト教的な時間の観念を確固たるものにするのもまた征服である(この考え方を継承したのが、のちのコミュニスムである)。[2, pp.119–120]

参考文献

[1] カール・マルクス(著), フリード リヒ・エンゲルス(編), 向坂 逸郎(訳). 資本論, 岩波文庫, 第一分冊. 岩波書店, 1969. = Karl H. Marx. Das Kapital :Kritik der politischen Oekonomie, I. 1867.

[2] ツヴェタン・トドロフ(著), 及川馥, 大谷尚文, 菊地 良夫(訳). 他者の記号学. 法政大学出版局, 1986. = Tzvetan Todorov. La Conquête De L'Amérique : La question de l'autre. Éditions du Seuil, Paris, 1982.

[3] 三浦雅士. 近代的自我の神話. 見田宗介ほか(編), 自我・主体・アイデンティティ, 岩波講座現代社会学, 第 2 巻, pp. 149–209. 岩波書店, 1995.

[4] 大塚久雄. 共同体の基礎理論. 岩波現代文庫. 岩波書店.

[5] 柄谷行人. マルクスその可能性の中心. 講談社学術文庫. 講談社, 1990.